

# 時の感覚——幸田文の仕事と面影

青 木 奈 緒

ふとなつかしい響きのことわざが頭に浮かんだ。一樹の蔭一河の流れも他生の縁。共に樹下で雨をしのぎ、同じ河の水を汲むのも前世からの縁と思つて大切にしようという教えである。ここでは見ず知らずのひととの縁を言っているのだろうから、身内にあてはめるには無理があるのかもしれないが、「學鐙」は私にとつて時代を超えて大きく枝をさしかけてくれる大樹のイメージである。

それは祖母・幸田文が昭和四六（一九七二）年一月に「木——えぞ松の更新」を寄稿したことに関係する。雪深い北海道の自然はきびしく、運良く倒木の上に着床した種だけが朽木の栄養と温もりを頼りに生長することができるという。倒木更新と呼ばれる、木の命の輪廻を見つめて描いた作品だ。当時六六歳だった祖母はこれをきっかけに一三年半に渡つて計一九回、樹木をテーマにした随筆を「學鐙」に寄せた。連載というには変則的で、昭和四七（一九七二）年から四年間はお休みを頂いている。その間、祖母は奈良県斑鳩町にある聖徳太子ゆかりのお寺、法輪寺へ足繁く通い、戦時中に落雷で焼失した三重塔を再建するお手伝いをしていた。もとより塔は木組みの建築物であり、晩年の祖母の興味は人の内面

からもの言わぬ木々へ、そこから山の「崩れ」や自然環境へと移つていった。

のちに「木」としてまとめられることになる「學鐙」での連載の中で、いわゆる名のある樹木は屋久島の縄文杉のみである。銘木を訪ね歩くというよりは、興味を惹かれるままに静岡県と山梨県の県境にある安倍峠に楓の純林を訪ね、宮大工の棟梁から聞いた木材の命の話を書き、幼い日の藤の思い出を回想した。

そうした数々の随筆の中でも圧巻なのは、まっすぐな良材となることで知られる木曾の檜を見に行つて、何らかの理由で木の内部に歪みやねじれを抱えて生長してしまったアテと呼ばれる木と対面したときの筆致だ。アテは木材としては等級外の汚名を着せられる。その悪さを目のあたりにしようと、祖母は製材所にわざわざ頼んでアテを挽いてもらう。癖をあらわに、刃向かいつつ切られるアテに祖母は自己投影し、身を切り裂かれる痛みを描いている。

これらの取材をしていたころ、祖母は旅先で見聞きした話を私にしてくれ、数えるほどではあるが取材へも連れて行つてくれた。そうした折々に祖母は、「人は心の中にたくさん

の種を持っているんだよ。一生芽吹かずに終わってしまいう種もあるのだから、芽吹いたときには大切に育てておくれ」と言っていた。思い返せば祖母がしてくれた木々や自然の話は、そうと気づかぬうちに私の心の種となっていたのだろう。

時を経て、祖母がまいてくれた種はそれぞれに芽を吹いた。かつて法輪寺の塔再建の折に祖母が知りあった若い大工さんが立派な宮大工の棟梁となっており、そこへ伺う機会を得た私は、厄介物とされるアテ材が個性を活かして役立っている現場に行きあわせた。誰よりもこの話を伝えたかった祖母はすでに他界しており、それからしばらくして「學鏡」にこのときのことを書いた。

その後、私は安倍峠の楓の純林も訪ね、祖母が見たいと願ったものの、山の奥深いところゆえ時季をはかりきれず、叶えられなかった芽吹きのうちくしさを体験した。もやに煙る幻想的な景色を描き、託す先はやはり「學鏡」だった。そう思つて見直してみると、私だけではない連鎖がある。

母方の家は曾祖父・幸田露伴、祖母・幸田文、母・青木玉とももの書きがつづき、細々ながら私を入れれば四代となるのだが、意図して文筆のバトンが受け渡されたわけでない。これまで私は、各々がそれぞれの状況下で判断し、めぐりあわせが重なっただけのことと考えてきた。けれど結果として「學鏡」には四代つづけて寄稿するという幸運に恵まれている。「學鏡」という大樹のもと、四代で寄せた原稿をまとめて読むと、そこに不思議なつながりが浮かび上がる。人生は旅と

いう例えがあるが、露伴が「机辺閑話」という、数々の書物についての随筆をたずさえ「學鏡」の木蔭に立ち寄ったのは明治三六（一九〇三）年。今から数えれば一十六年も前であり、祖母もまだ生まれていない、遠い昔という感がある。

そして祖母がその「机辺閑話」に触発され「平安」を書いたのは、それから六〇年後のこと。その後、祖母は「木」の連載を「學鏡」の木蔭で執筆し、母は祖母亡きあと、平成一一（一九九九）年に祖母がお世話になった編集者、本庄桂輔さんとの後日談を、祖母が好んだ木蔭で回想した。そして私のことはすでに書いた通り。気がつけば「學鏡」の大樹のもとでなんと間遠な伝言というか、書き置きを残し、受け取る作業がなされていたことだろう。寄るべき大樹あつてこそ思いが託せるのであり、初めからわかつていてつづいたご縁ではない。感謝するのみである。

曾祖父から祖母、母へと読み返せば、自ずと時の流れへと思いが及ぶ。時は計りがたい。刻一刻とこの瞬間が過去へと過ぎていくことなど深刻に考えていては日常生活は送れないが、こうした折に過ぎてきた時の流れが鮮明に立ち現れると、嫌が応にも、自分が過去に背後をまもられて今の時代を生きていることに気づかされる。

曾祖父は、日々は「ただ、さらさらと水の流れるように涼やかに」過ごせと言ったという。時間の座標軸の中に、改めてしっかりと自分を据え直してもらったような感覚を覚える。

（あおき・なお 作家）